

聖書:イザヤ書59章9～21節

説教:とりなす者がいなければ

はじめに

本年最後の礼拝を迎えています。この一年を振り返れば、正月から大きな地震や事故が起き、イスラエル、ウクライナの戦争が依然として続いています。身近なところでは、人と人との関係で苦しんでいます。相手とギクシャクしてしまってどうしたらよいか分からない。そういう壊れた人間関係を引きずり、になんとかしなければと思いながら、どうすることもできずまた一年が終わっていく。そのようにして多くの人が苦しんでいます。どこに解決があるのでしょうか。それとも、「あなたは信仰者なのだから、まずあなたが先に相手と和解しなさい」と言われているのでしょうか。でも、それができるなら悩まなかったでしょう。できないから困っているのです。いったいどうしたらよいのでしょうか。イザヤ書から探ってまいります。

1 公正は遠く離れ

1) 虐げと反逆

ここには偽りを語るることについていろいろな表現がありますが、そのなかから13節に注目します。「私たちは主に背き、主を否んで、私たちの神に従うことをやめ、虐げと反逆を語り、心に偽りのことばをはらんで告げる。」

私たちは主に背いた者であるとか、主を拒んで神に従おうとしないという話しはおなじみで、みな知っています。問題なのは、その具体的な中身です。「虐げと反逆を語り、心に偽りのことばをはらんで告げる。」これが主に背くことの詳しい内容です。例えば、無罪であるはずなのに、偽りの証言をしてある人を有罪にしてしまうこと。あるいは決められた以上の金利で金を貸して利得を貪ること。これが虐げと反逆の意味です。「振り込め詐欺」もまさにこの典型です。

2) 心に偽りをはらんで

これだけであれば、「私はそんなひどいことはしていない」と言い逃れはできるでしょう。しかし続きがある。「心に偽りのことばをはらんで告げる。」聖書の鋭いところは、「はらむ」ということば、身ごもる、妊娠するということばを使っているところです。人の心に浮かぶ悪い考えというのは、初めから大きいわけではない。むしろ非常に小さく、たいていは忘れて消えていく。ところが、

あることは時間とともにどんどんふくらんで大きくなり、ときが来ると、まるで子どもを生むように口から偽りのことばを吐き出していく。まさにイエスが言ったとおりです。「口から出るものは心から出て来ます。それが人を汚すのです。」(マタイ15章18節)

もちろん、すべてのことばが悪いものではありません。ことばを正しく使うなら、悲しんでいる人を慰めたり励ましたりもします。しかし、使い方を間違えると人を傷つけ、人間関係が壊れてしまう大きな原因になっています。聖書にはよい解決があるのでしょうか。

まず悪いニュースから。9節で「公正は私たちから遠く離れ、義は私たちに届かない」と言っています。それでこの世界は光がなくなり、闇に包まれてしまいました。光がない闇の世に生きている者である以上、心に偽りをはらむことから免れません。これは悪い知らせです。

3) 悪から遠ざかっている者も倒れる

それでも、この世界は広いわけですから、正しい人がいるかもしれません。ところが15節前半にこうある。「そこでは真理は失われ、悪から遠ざかっている者も略奪される。」悪から遠ざかっている者、すなわち正しい者は確かにいた。ところがあまりにもこの世界が悪に満ちているので、正しい人たちが悪い方に引き寄せられて倒れてしまったというのです。

たとえばダビデです。彼がサウルの下で働いていたとき、激しいパワハラを受けて大変苦勞をしていました。でも絶対に罪を犯さないと誓って、正しい信仰者として歩んでいた。ところがイスラエルの王になると、彼は大きな罪を犯す。昼寝から目覚めて屋上に上がり、バテ・シェバを遠くに見たとき、ダビデの心に小さな偽りをはらみます。それが時間とともに大きくなると姦淫の罪を犯し、事件をもみ消すために夫であるウリヤを合法的に殺し、虐げと反逆の罪を重ねていきます。あの聖書の中で飛びぬけてすばらしい信仰者とされたダビデでさえもこんなありさまです。

2 主

1) 唾然とした

主はどのようにご覧になったのでしょうか。15節後半から16節前半。「主はこれを見て、公正がないことに心を痛められた。主は人がいないのを見て、とりなす者がいないことに啞然とされた。」

ダビデが罪でさえ罪に倒れました。もはや地上には公正な人はいません。そのような状態を主がご覧になり、心を痛められた。そこまではわかる。驚くのはその先です。「とりなす者がいないことに啞然とされた。」神は全知全能で、なんでもご存じのはず。それが、とりなす者がいないことに突然気がついてびっくりした。そんな意味なのか。もちろんそんなことはない。アダムとエバが罪を犯した時点から、神はこうなることはすっかりわかっています。「啞然とされた」と訳されている言葉は、もともと土地が荒れ果てるとかわびしくなるという意味があります。ですから「悲しんだ」とか「困った」と訳することもできる。それはずっと私たちを信頼していたということの表れでもある。決して後ろ向きのことではない。

2) 主ご自身が救い主となる

なんとかしなければならぬ。もっと積極的なのです。あなたがたは自分で自分を救うことができない、ということがこれでわかったでしょうと確認させる。そうしてから、では代わって主ご自身が救い主となられる。そのように話を進めている。いきなり神がしゃしゃり出て、わたしがすることを黙って見ている、ではなかった。

この方が身にまといられた数々の道具が詳細に述べられていることに注目します。救いのみわざというのは、決して軽い話しではない。人を罪から救うためには、たとえ神であろうともこれだけの武装をしなければならなかった。それほど罪は強い力をもっているのです。

3) とりなす者がいない

ところで、なぜ「とりなす者」なのでしょう。たとえばAさんとBさんがけんかをしていただけれど、仲直りをしたいと思ったとします。お互い腹を立てているうちは、AさんとBさんが直接一対一で話しをつけようと思ってもけんか別れになるだけで、解決はできません。そこで登場するのが「とりなす者」仲介者で、たとえば町の有力者の方に中に入ってもらうということが田舎ではあつたりします。

人が神に逆らい神の敵となったとき、神と和解するために、だれがとりなす者となる資格があるのか。例えば泥棒をした人が後から悔い改めて謝

りに行こうとしたとします。もちろん一人では行けない。仲介者を立てるのですが、同じ泥棒仲間を仲介者に立てるわけにはいかない。被害に遭った人も、「この人なら信頼できる」と思える人でなければならぬ。罪人が神と和解することも同じ。とりなす者は、公正な者でなければならぬ。ところが地上には仲介者としてふさわしい者がいない。それで主ご自身がとりなす者となられ、ひとり子であるイエス・キリストを私たちのところへ人となって遣わしてくださいました。もし、とりなす者が与えられなかったなら、今ごろ私たちはどうなっていたのか。神と和解することはできません。人とも和解することはできない。暗闇に取り残されたままだったでしょう。

3 契約

1) 背きから立ち返る者のところへ

ではとりなす方となられたイエス・キリストによって、だれが救われるのでしょうか。18節で「主は彼らの仕打ちに応じて報い、(中略)報復される」とあるので、恐ろしい光景が目に見えまいます。たしかに最後まで主に逆らう者には、神のさばきがくだります。けれども20節こそ、私たちの慰めです。「しかし、シオンには贖い主として来る。ヤコブの中の、背きから立ち返る者のところに。——主のことば。」

贖い主は誰の所へ来ると書いてあるか。背きから立ち返る者のところに、です。例え昨日まで主に逆らい、散々に悪さをしてきた者であっても、今日、主の前に罪を認め、主に立ち返ると思いを定めたのなら、贖い主はそのような者のところへ来てくださる。これが主の約束です。

ここでひとこと確認しておきます。主は、完全に正しい者、絶対に罪を犯さない人のところへ来る、と言っているのではない。何度も言いますが、この地上には公正な者はひとりもいないのです。主が心を痛められるほどに、だれもいなかった。ですから私たちは正しい者になれない。ではそこで絶望するしかないのか。いいえ。私たちにできることが一つある。「私は主に逆らってきました」この告白です。主に立ち返るとは、このようなことです。この告白によって、主は救ってくださると言うのです。

2) 永遠に離れない

こうして私たちは救いに入れられました。では、その影響はどのように拡がっていくのか。21節後半。「わたしがあなたの口に置いたわたしのこと

ばは、あなたの口からも、あなたの子孫からも、
子孫の子孫の口からも、今よりとこしえに離れない。」

ここに二つの約束があります。一つ目は時間の軸で見たときのこと。物事には有効期限とか賞味期限というものがあります。救いの有効期限いつまでか。今から永遠です。永遠に有効だということ。二つ目は空間的な軸で見たときのこと。救いの範囲です。救いのみわざはどこまで拡がるのか。私たちは救われたとき、自分ひとりのことしか見えていません。けれども救いは一人ではとどまらない。主の目には後の世代の救いまで見えています。あなたの子孫、そのまた子孫の子孫。ずっと続いていく。

これは驚くべきことです。現在という時計で見るなら、ここに集っている人たちの数はそれほど多くはないかもしれない。けれども主の時計は永遠という未来も見える。その時計に従えば、神がアブラハムに言われたとおりに見えてくる。「さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。」さらに言われた。「あなたの子孫は、このようになる。」（創世記15章5節）。

ひとり一人の信仰告白が、想像をはるかに超えて多くの人の救いにつながっていく。先輩たちから私たちへ、そして私たちから次の世代へ。こうして私たちはつながっています。今、人との関係が壊れていても、やがて主がとりなし、つなぎ合わせてくださる。そのように期待しながらまた新しい年を迎えたいと願います。